時評

超・現実の系譜

奥田亡羊

角川「短歌」九月号が「シュルレアリスムと短歌」という特集を組んでいて、それを興味深く読んだ。世界の文化芸術活動に多大な影響を与えたアンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』から今年で百年になるらしい。以前、巌谷国士訳で読んだが、随所に笑いが盛り込まれていて、なかなか洒脱な文章だったことを記憶している。

シュルレアリスムは一九二〇年代のパリで起こった芸術活動で、第一次世界大戦によって浮き彫りになった近代文明の行き詰まり、非人間性に対する反動として世界的な広がりを見せた。芸術家ではピカソやブニュエル、ダリ、マグリットらが参加した。

角川の特集では、当時の前川佐美雄、塚本邦雄、加藤克己らへのシュルレアリスムの影響を、三枝昂之、坂森郁代、斉藤光悦らがそれぞれ指摘する。とくに三枝昂之は、前川佐美雄がいかにモダニズムを受容していったか、昭和初期の時代背景、近代合理主義や戦争との関係から論じていて明解だった。

これまでも何回か触れたが、三枝昂之は『前川佐美雄』、『昭和短歌の精神史』、『佐佐木信綱と短歌の百年』の三冊の著書を通じて、主に「心の花」を軸に、近現代短歌の歴史を書き直す仕事を続けている。「アララギ」と「心の花」、この二つの流れをイメージすることは短歌史を考える上で重要なことだと思う。

乱暴な話になるが、問題をわかりやすくするために、仮に長塚節や島木赤彦らの写生に象徴される「アララギ」を現実の系譜、佐佐木信綱の理想主義に象徴される「心の花」を超・現実の系譜と仮定してみよう。

信綱の弟子でモダニズム短歌を担った前川佐美雄や斎藤史。その前川佐美雄を師と仰いだ塚本邦雄、山中智恵子、前登志夫。岩田正が「土俗の歌人」と呼んだのは山中、前の他に岡野弘彦、馬場あき子。さらに佐佐木幸綱、河野裕子、伊藤一彦、渡辺松男と続く。どうだろう、太々とした超・現実の流れが見えてこないだろうか。

超・現実というネーミングはちょっと違うかもしれないが、これは誰かいい呼び方を考えていただきたい。

・春ここに生るる朝の日を受けて山河草木みな光あり

三枝昂之は『佐佐木信綱と短歌の百年』で、この佐佐木信綱の『山と水と』の一首を敗戦後の日本の再建を祈る歌とする佐佐木治綱の鑑賞を紹介している。

塚本邦雄は「短歌といふ定型短詩に、幻を見る以外の何の使命があらう」と語った(「短歌考幻学」)。

佐佐木幸綱は「短歌は方法ではない。志である」と言う(『極北の声』)。素材や技法よりも、なぜ歌うのか、作歌思想・モチーフが大事だと言挙げしたのだ。

現実をコピーするために短歌があるのではなく、現実と理想(虚構)を結ぶものとして短歌がある。柿本人麻呂が石見相聞歌で「靡けこの山」と絶唱したように、私たちも山に呼び掛けることができるか、どうか。